

「中国の外国為替取引市場と人民元相場」

童 適平

松山大学経済学部教授

人民元相場は再び熱い話題になった。しかし、多くの議論は人民元の切り上げや切り下げに止まり、人民元相場の形成メカニズムやその根底原因を探られていない。本稿は中国の外国為替市場を分析し、人民元相場を規定する原因を探ることに目的がある。

まず 1994 年からスタートした外国為替市場の成り立ちとその概要を紹介する。市場の形を採ったものの、経済全体のファンダメンタルの現われと言われる一国の通貨である人民元の対ドル相場は 1998 年以降固定したまま、変動しなかったことは市場の価格発見メカニズムが働いていないと言わざるを得ない。

次に、人民元相場の硬直性をもたらした市場の欠陥を分析した。人民元対ドル固定相場は対米輸出に安定した環境を提供した反面、アメリカ以外の地域との経済交流を進める企業を為替リスクに曝す側面もあり、経済多様化に進む中国経済の不安定要因になりつつある。

人民元相場の硬直性を規定した根本原因は 1994 年からスタートした外国為替管理制度そのものである。この制度により、市場参加者は外国為替指定銀行に制限され、取引対象も内容も限られ、市場としての機能を形だけにした。外国為替管理制度の改革が進められているが、そのスピードに耐えられるかは今の人民元切り上げの焦点となっている。これで、本稿の第三の部分は外国為替市場と外国為替管理制度との関係を取り上げ、外国為替市場が、市場としての機能が働かなかった原因を分析した。